

考古天文学からの提言

— 星空景観仮説の紹介 —

北條芳隆

考古天文学会議代表・東海大学文学部

はじめに

吉野ヶ里遺跡の旧日吉神社境内地区から 2022 年 6 月に発見された箱式石棺墓 SC3037 の蓋石には、無数の十文字が刻まれていた。佐賀県文化課文化財保護室の支援を受け、私たち考古天文学会議はこの線刻が過去の天体現象と関わる可能性を検討してきた。

3 枚の蓋石のうち被葬者の足下側 2 枚（蓋石 2 と 3）は線刻面を上方に向けて被せられており、十文字や田の字状が大小・粗密をもって展開する状態をみた文化天文学の高田裕行氏（国立天文台天文情報センター）は、即座に夏の天の河が描かれた可能性を想起した。ただし頭位側に被せられた残りの 1 枚（蓋石 1）の内面にも同様の刻線が刻まれ、さらに頭位側小口部の側石内面にも刻線があることが判明したため、統合的な解説案の提示が必要になった。本会議でも複数の解説案が検討されたが、最終的に天の北極すなわち北辰に向けて死者の魂を誘う星空の情景案が再度高田氏によって提起された。もとより今後の検証を要する仮説ではあるものの、論理的な整合性は担保できたと考えている。

2024 年 12 月 14・15 日に吉野ヶ里歴史公園で開催された第 10 回考古天文学会議では、この高田最新案が「星空景観仮説」として公表された。さらに古代史学の田中禎昭氏（専修大学文学部）からは非常に重要なコメントが提示された。今回はその概要を紹介するものである。

1 〈arcAstro V R〉をもちいた映像作成

2019 年度から始動した考古天文学会議では、国立天文台の関口和寛氏と science NODE の岩城邦典氏によって開発された、世界各地の遺跡と過去の天体景観との関係を視覚的に再現するシステム〈arcAstroVR〉を同名の HP から公開しており、今後とも各方面で活用されることを期待している（図 1）。

吉野ヶ里遺跡については、主要な区画および復元された建物群と周辺地形の詳細情報を 3 次元データとして取得し、本システムに組み入れた。これまでの検討によって判明した事象については「卑弥呼がみた星空」（2020）、「弥生時代の暦を考える」（2021）と題する 2 本の映像を作成し、先の HP から公開している。前者は弥生時代中期前半に築かれた北墳丘墓の軸線が雲仙普賢岳を向く事実や、この時代には南十字星が冬の深夜に雲仙普賢岳の上で輝いていたこと、さらに北内郭の軸線は「高い月」の満月の出に向けられていた事実を紹介したものである。また後者は、北内郭が築かれた 3 世紀前半には中国側の太陰太陽暦の知識が抜粋的にもたらされた可能性を指摘し、二十四節気の当該日の日の出や日の入りと複数の建物の方位が一致することや、二十四節気と望（満月）の一致するタイミングが特別に重視された可能性が高いことを紹介した映像である。



図1 arcAstroVRのHP画像

また2024年夏には、旧日吉神社境内を含む四波屋四ノ坪地区の甕棺墓群についても上空からのドローン撮影と地上からのフォトグラメトリ撮影を実施し、〈arcAstroVR〉に組み込んだ。これによって吉野ヶ里遺跡の全区画が網羅され、「星空景観仮説」についても映像化を行い、表題も「箱式石棺墓の蓋石に刻まれた十文字の解釈をめぐって」とした。本シンポジウムでもこの映像をご覧ください。

2 「星空景観仮説」

① 夏の銀河（蓋石2と3）

足元側に被せられた蓋石2と3には、夏の夜空に見られる明るく幅の広い銀河（天の河）が描かれたと考えられる。大きな十文字は2等星以上の目立つ星、小さな十文字は3等星以下の目立たない星、田の字状に重なる部分は星の密集する状態だと仮定して全体をみると、天頂近くのベガ・デネブ・アルタイルを結ぶ夏の大きな大三角形や、東の空に見える秋の四辺形（ペガサス座とアンドロメダ座）と対応する大きな十文字が同定できる。雲仙普賢岳の上空で輝く銀河中心は田の字状に重なる部分と対応する。さらに線刻がほとんどない帯状の空白は銀河の暗黒帯に比定される。このように大枠での矛盾はない（図2）。



図2 蓋石2と3に刻まれた銀河説

天の河が死者の魂を運ぶ河ないし道だとする観念は世界各地にあり、古代中国でも西王母信仰との関連で重視されてきた。吉野ヶ里遺跡を営んだ人々にとっても夏の天の河は天上の他界を連想させる情景であった可能性は指摘できる。

なお全体の構図を規定する“元図”はどうかやって作成されたのかについては、目下検討中である。たとえば天蓋状の粗い編み物

と支柱を作成しておき、その内部から観察された星々の位置に目印を縫いつける“範型”があった可能性などが検討されている。

② 北辰へ誘う月と三惑星（頭位側小口部と蓋石1）

頭位側小口部に刻まれた線刻は直線が目立ち、小口の中央付近を天の北極である北辰だと仮定すれば、3本の直線は北辰の位置を指し示す目安ラインだとみなしうる。すると小口部北西上端の大きな十文字は北斗七星の第1星であるドウベに、下に伸びる直線の先にある十文字はこぐま座のフェルカドに比定される。小口部が北辰であるなら、蓋石1の舟形から小口に向けて長く伸びる直線は北辰に向けて死者の魂を誘う導線だと解釈することができ、この直線と小口側で交差する柄杓のような弧線は北斗七星を表したことになる。

このような仮定のうえで本石棺墓の造営年代である3世紀の星空を点検すると、214年6月30日（ユリウス暦）に現れた印象深い情景が抽出されてくる。西の空には月齢5.2の月の下に土星・木星・火星の三惑星とスピカ（おとめ座α星）が等間隔で並ぶ情景が現れたのである。このとき木星と月を結ぶラインを北に向けて辿ると北斗七星の柄と杓の境界付近を通り天の北極すなわち北辰へと至る。だとすれば、蓋石1に刻まれた舟のような弧線は、月と三惑星と恒星の並びを描いたもので、それを舟にみたて死者の霊を北辰へと誘う乗り物として刻み込んだとの解釈が可能である（図3）。また箱式石棺墓の方位は西北西であるが、蓋石1に刻まれた長い直線は真北から30度西に振れる角度を示しており、3世紀の北斗七星の周回軌道内に入る。つまりこの直線は「みなし北辰」を志向したものだ判断できる。

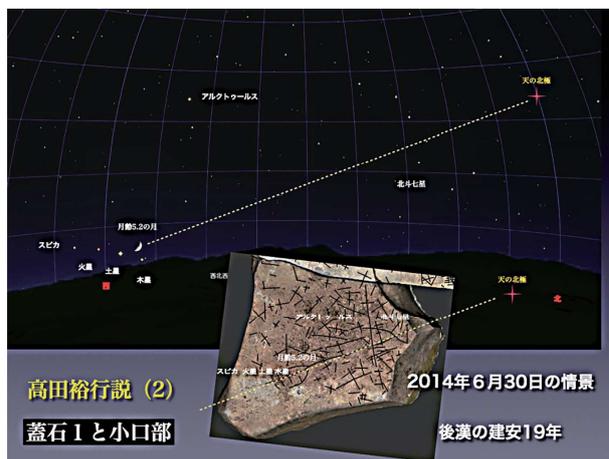


図3 蓋石1は北辰に死者の魂を誘う月と3惑星説

3 太微垣付近で生じた三惑星の会合

頭位側小口部と蓋石1に関する高田最新案は、北辰信仰や北斗星君信仰といった同時代の中国における天上他界観を仮に吉野ヶ里遺跡の弥生人も承知していたとすれば、との前提条件を与えたうえで構想された仮説である。現時点においてこの前提条件が成立しうるかの考古学的証拠は一切ない。ただし214年6月30日夜の情景は、じつは同時代の中国において政変の予兆として重視されていた事実を田中禎昭氏が解明した。

『後漢書』献帝本紀・建安18年（213年）には次の記事がある。現代語に訳すと「夏五月丙申（六月十六日）、曹操が自立して魏公となり九錫を加えられた。（中略）この年、歳星（木星）、鎮星（土星）、熒惑（火星）がともに太微垣に入る」と記された。三惑星の会合が太微垣に現れた事実を瑞祥ととらえ、曹操の魏公への就任は天命だとする記事である。

ただし3惑星が太微垣付近で会合する現象は、213年ではなく、現実には214年6月

